

# 会派視察・研修報告書

会派名 自民クラブ

代表者名 柴田 雅也

|                        |                                                                             |
|------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 1 日 に ち                | 令和 7年 7月 24日 ( 木 )                                                          |
| 2 視 察 先<br>研修名、主催者及び会場 | 兵庫県 丹波篠山市北新町 97 (一社) 丹波篠山市観光協会                                              |
| 3 参 加 者                | 柴田雅也、城處裕二、玉置真一                                                              |
| 4 調査・研修の<br>テーマ        | 【六古窯の一つ丹波焼を核とした<br>古民家活用や陶泊等観光誘客の取り組み】について                                  |
| 5 主な内容                 | ① 丹波篠山市における丹波焼の位置づけ<br><br>② 観光誘客の状況<br><br>③ 自治体施策との連携状況<br><br>④ 古民家活用の実態 |

6 所感、提言事項、  
課題等

【柴田 雅也】

多治見市においては昨今、陶産地として滞在型作陶施設や作陶がコラボした民泊施設が増え、徐々にではあるが交流人口が増えている。

今回は、日本一の陶磁器生産を誇る美濃焼産地の東濃西部が、どのような視点で魅力を高め、観光誘客などにより交流人口を増やし、定住者増加へとつながるか、伝統的な陶産地の取り組みについて参考にすべく視察目的として選んだ。

丹波篠山市は丹波焼と立杭焼の窯元が立ち並ぶエリアがあり、その中で丹波焼窯元での作陶体験プログラムを組み込んだ陶泊は現段階では窯元1軒が参加しているのみである。同じような事業で多治見市では、セラミックバレー振興補助金活用により現在は滞在型作陶施設事業者が増えつつある。

ただし、窯元が軒を連ねる丹波焼窯元エリアでの陶泊はより魅力が増すと感じた。

また、観光誘客について年間来訪者70万人という数字により、丹波篠山市の魅力を改めて認識した。

丹波篠山市は、大阪市中心部から高速道路で1時間ほどの距離で、城下町という観光資源を持っており、日帰り観光にはちょうどいい距離かもしれないと感じた。そのような中で丹波篠山市に魅力を感じて、カフェなど店舗を創業するために丹波篠山市へ移住する人も多いとのことであった。

まさに観光誘客から移住へとつながっていると実感した。

そのような中で今回の視察目的について調査する過程で、交流人口の増加と定住者増加への取り組みについて、多治見市としても参考にすべく内容がいくつもあった。それが以下の内容である。

- ・ 定住促進施策が市内中一律ではなく、重点的に注力する地区とそうでない地区と分けており、方針が明確である。
- ・ 定住支援補助は大きな金額を補助するのではなく、多重多層的に細やかなメニューから該当メニューを選択して補助を受ける。
- ・ 事業を始める際に支援を受ける場合は、商工会での経営指導とともに審査を通過する必要がある。

以上のようなメリハリのある取り組みもあり、丹波篠山市への移住者は毎年200人程度と、移住施策として安定的な実績がある。

これら話を聞く中で、重要なポイントがあることがわかった。

それは行政だけでなく、市民も自分たちが住む街に誇りを持ち、魅力について明確に認識していることである。それが、訪れる人に伝わり、丹波篠山に移り住もうと思う人が増えると感じた。

最後に丹波篠山市観光協会「私たちの誓い」を紹介する。

1. 私たちは、丹波篠山ブランドの向上に貢献します。
2. 私たちは、大切な伝統を守ります。
3. 私たちは、常に最高のサービスを提供します。
4. 私たちは、新たな価値の創造に努めます。
5. 私たちは、日本中に、世界中にネットワークを広げます。
6. 私たちは、未来を担う子どもたちに夢を与えます。

多治見市としても参考にしたい内容である。

## 【城處 裕二】

1999年4月1日兵庫県多紀郡の篠山町、西紀町、丹南町、今田町の4町が合併して、篠山市が誕生しました。当時の人口は約47,000人。2019年に丹波篠山市に市名が変更された。兵庫県の中東部に位置し、人口は38,734人（令和7年5月末現在）、東は京都府、西・北は丹波市・加東市、南は大阪府・三田市などに隣接。舞鶴若狭自動車道の開通やJR福知山線の複線化によって、関西経済圏の大阪・神戸からの時間的距離が大幅に短縮され、1時間圏域となりました。

六古窯の一つである丹波焼の産地でもある。移住・定住促進施策について、助成メニューが豊富で、条件によって組合せも可能であるとのこと。

アグレッシブな移住者により自然発生的に出来たクラフトビレッジでは約40種のクラフトがゆるやかなネットワークを形成しているという。

産官連携、商工会議所による指導がフィルター機能を担い、まちに有益な人材を誘導している。

別件であるが、5期目の市長が、町村合併により260に及ぶ自治会を、こだわりをもって維持されていることにも興味を持ちました。

## 【玉置 真一】

日本六古窯とは、古来の陶磁器窯のうち、中世から現在まで生産が続く代表的な6つの窯（越前・瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前）の総称です。

※残念ながら美濃焼は含まれておりません。

この度、丹波焼の産地丹波篠山市を視察しました。

平成11年4月1日に多紀郡4町（篠山町、西紀町、丹南町、今田町）が合併して、篠山市となり、令和元年5月1日に市名を変更し丹波篠山市となりました。

篠山城の城下町として栄えたこの町、河原町妻入商家群や武家屋敷群などの歴史的な建物はもちろん、古民家をリノベーションした飲食店やお土産屋さんもたくさんありました。

視察目的とは少しずれますが、視察研修の冒頭に食の話をされました。

丹波と言えば黒豆を思い浮かべますが、丹波篠山は食の宝庫で、黒豆の他、丹波栗、マツタケ等高級食材をはじめ、ゴボウ、<sup>あもちいも</sup>天内芋、西瓜、イノシン料理も有名との事でした。

窯が開かれおよそ800年、今田町の<sup>たちくい</sup>立杭エリアでは、現在3キロにわたり約60もの窯元が軒を連ね、素朴な生活器を今日まで焼き続けておられます。

「丹波焼」といっても「窯元」や「作家」によって作風が全く違うので、自分に合った器を見つけるのも楽しみのひとつだと感じました。

商品の流通について美濃焼と違うのは問屋がなく、ほぼ直接販売との事でした。

その為生産する側がアイテム・数量・釉薬などを自由に選択し、価格も決める。そしてその収入で生活が成り立つ。作陶家にとって理想のカタチだと思いました。

勿論ネット通販も積極的に行っておられます。

それを実現できるのも、大きな製陶工場でなく、ほぼ家族で営む小規模窯であることが、ある意味メリットであると考えます。

組合は存在するが、主に原料の供給との事でした。

丹波篠山の工芸を代表する丹波焼や王地山焼の窯元に弟子入りし、伝統的技法を習得し、丹波篠山市内で陶芸を生業にしようとする方に対し、『窯元弟子入り支援事業』として、補助金を交付されております。補助要件として

- (1) 丹波篠山市に住民票を置き、丹波篠山市内の住宅に賃貸契約で居住すること。
- (2) 補助金の交付申請書を提出し受理された日において、年齢がおおむね 40 歳以下で、かつ窯元に弟子入りした後 3 年以内であること。
- (3) 補助期間終了後に丹波篠山市内で窯元として開業又は就業しようとする意志が認められるものであること。

が定められており、移住につながる事業だと思います。

また、市内の飲食店または宿泊施設を対象に、市内産の食器類で豊かな丹波篠山の食材を活用した料理により観光客などをもてなすことを推進するため、市内産食器類の購入経費の一部を助成する『食と器の出逢い事業補助金』の取り組みもされておられます。

この事業により地元の食と歴史ある産業に触れていただく取り組みは、国内だけでなくインバウンドに対しても効果がある事業だと思います。

多治見市も、生産者に限らず、市内飲食店等対象にこのような制度も考えてみてはどうかと思いました。

7 写真等

※視察の場合は必須、研修の場合は任意



※視察先、研修先ごとに1枚作成すること。

※「6 所感、提言事項、課題等」は、参加者全員分を記載すること。